佛教大学社会学部論集　第 56 号（2013 年 3 月）

新思想の伝播者潘光旦のひとと学問

――著名学者潘光旦の生誕 100 年を記念して――

励　　天予 編著
星　　明 訳

〔訳者まえがき〕

この訳文は，陳理・郭衛平・王慶仁主編，2000 年，『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』，中央民族大学出版社に掲載された励天予編著の「狂言惊座敢先傳－著名学者潘光旦先生百歳誕辰祭」を全訳したものである。励先生は，1913 年生まれで，1937 年に滬江大学社会学部を卒業し，同大学付属の滬東公社で仕事を経て，当時イギリス租界にあった上海工部局で社会福祉の仕事をした。その後，47 年から 49 年までコロンビア大学でソーシャル・ワークを学んだ。帰国後，49 年から 52 年まで母校の滬江大学で社会学を教えた。励先生が卒業し，教鞭を執った滬江大学は，かつて潘光旦も教鞭を執ったことがあるうえに，実際に励先生は北京で潘光旦の自宅を訪問している。

この励論文には，民国期の社会学者のアメリカ留学，日中戦争時の大学の疎開，新中国成立直後の社会学の存続問題および国家による 55 民族の平等団結政策の脈絡のなかでの民族研究，西南連合大学，著名な社会学者呉文藻，費孝通らの民族共同研究，反右派闘争および文化大革命のなかでの社会学者の処遇などをみることができる。

なお，付録の「潘光旦年譜」は，韓明謨，2005 年，中国社会学名家，天津人民出版社，pp.322～330 を翻訳したものであり，また反右派闘争および文化大革命なかでの潘光旦に対する処遇は，前掲の『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』の掲載論文から関連する記述の部分を翻訳したものである。

は　じ　め　に

潘光旦先生は，江蘇省宝山県（現在は，上海市になった）(①)羅店鎮のひとである。20 世紀，長江の河口には 3 人の名望家がいた。一人目は嘉定の顧維鈞，かれは早期に国際的に名前が知られた外交家である。二人目は瀏河の呉健雄である。かのじょはノーベル賞受賞者である李政道，楊振寧のために実験を行なったひとであり，全米物理学会の会長である。三人目が潘光

旦そのひとである。先生は国内で名高い社会学者，優生学者であった。先生は 1899 年 8 月 13 日生まれで，1967 年 6 月 10 日，北京で逝去した。享年 68 歳（67 歳 10 か月）。かれの社会学は社会進化論の立場であり遺伝学，優生学[②]に加えて，儒家哲学，民族学，英文翻訳そして漢字書法にも精通していた。かれの学識は広範囲にわたり，造詣が深く，著作と翻訳はおよそ 400 万字に達する。先生は 1926 年 8 月，アメリカから帰国後，働き盛りであり，大厦大学，暨南大学，滬江大学などで教職に就き，また，上海では前後して上海呉淞中国公学大学部社会科学院院長，光華大学文学院院長に任ぜられたし，英文の『中国評論周報』の編集にあたった。1934 年 9 月，清華大学社会学部教授に異動した（1952 年 10 月まで）。抗日戦争の時期には，昆明の西南連合大学[③]および清華大学の教務長，社会学部長に任ぜられた。新中国成立後，大学は北京に戻り，先生は中央民族学院教授に転任し，研究部第三室主任を兼務した。かれは障がいのある身体をいとわず，幾山河を越え，トゥチャ（土家）族，ショオ（畲）族などの少数民族問題を調査研究した。かれの門下生である費孝通先生と北京大学社会学部の韓明謨先生は潘先生を心から尊敬しており，前世代の社会学者のなかで学識がもっとも広く，人徳をもっとも感じさせる教師の一人だと称賛した。陳誉教授も西南連合大学で勉強していた時，潘光旦先生の学生であったが，先生の講義の内容は豊富であり，上手に話し続けてひとを飽きさせないし，興味が溢れるものであったと述べている。

1951 年の初夏，全国の社会学部はまさに情勢が非常に不安定な時であった。当時，滬江大学社会学部で教鞭を執っていたわたし（励天予）は北京での会議に出向いた時を利用して，滬江大学社会学部長の張春江教授と一緒に潘先生にお目にかかった。先生は質素で飾り気のない応接室を兼ねた書斎でわたしたちに会ってくださった。先生には左足しかないのが目にはいった。先生は左右両脇で松葉杖を支え，歩かれていた。先生は 50 歳を超えたばかりであり，まるまるとした顔，顔色がつやつやとしていた。人見知りがなく親しみやすく，行動がてきぱきし，自信に満ちあふれていた。わたしたちが滬江大学で教えていることを知った時，先生は大変喜び，1926 年アメリカから帰国後，かつて滬江大学で授業を兼任していたことを話された。先生はわたしたちに 1913 年に，清華学校の庚子賠償金によるアメリカ留学の準備班に合格したことを話してくださった。先生はスポーツが好きであった。ある時，運動場で走り高跳びをしている時に，不注意から落下して右足を骨折した。当時は，医学はまだ発達しておらず，足を切断するしかなく，一生の障がいが残ってしまった。また。先生はわたしたちに新中国成立当初，毛沢東と会見したことも話してくれた。毛沢東は，先生に以前に他のひとが翻訳したエンゲルスの『家族私有財産および国家の起源』に不満であるので，もう一度訳して欲しいと頼まれたことを話してくれた。潘先生は喜んで引き受け，原文に忠実な訳，訳文の流ちょうさ，ことばの優雅さを旨として翻訳を完成させ，書名を『家族，私産および国家の起源』と改め，1951 年には出版した。そのスピードをもってひとを感服させた。（新中国において）社会学の存続か，廃止かという問題に至っては，先生は，社会学の存続はあまり見込みがないだろうと

いわれた[④]。

潘先生の一生を総合的に観察すれば，次のいくつの領域から簡潔に述べることができる。

一．伝説化した学問探究の過程

潘先生は子どもの頃，宝山県羅店鎮の学校で勉強していた時，ひときわ秀でた才能をあらわした。かれはわずか13歳にして北京の清華学校の庚子賠償金によるアメリカ留学予備クラスに合格した。このことは一方ではもとより宝山の学校の教員が豊富な素質をもっていたことと関わっているが，他方ではまた潘先生が聡明で，才知があり，そして勤勉で学問好きであったことと切り離して考えることができない。かれは清華学校に入学後，毎学期すべて席次は上位にあったし，そのうえ英語は全学年でトップであったことが，その証左である。残念ながら，清華学校の（運動会での）走高跳びで骨折し，右足を切断した。そのため1915年，1916年の2年間休学し，入院治療や郷里で静養した。その数年，かれは身体の障がいがあったけれども，失望落胆することなく，ますます勉学にいそしみ，どの科目の成績も突出していた。1922年5月，ついに清華学校での学業を終え，7月にアメリカへ留学した。かれはアメリカの北東部ニュー・イングランドのニューハンプシャー州のダートマス大学の3年生に入学した。これは一般の清華卒業生に比べて1学年上位の学年であった。しかも1学期を学び終わっただけで，教務長はかれを4年生に飛び級させたので，かれは学部でわずか2年間学んだだけで，1924年にすぐさま学士の学位を獲得した。続けて，ニューヨークのコロンビア大学に入学し，動物学，古生物学，遺伝学，優生学を専攻し，1926年に卒業し，修士の学位を得た。潘先生は学生に対して，さまざまな学問を幅広く学ばなければならないし，文科を学ぶものはある程度理科の知識を学ばなければならないし，また理科を学ぶものもある程度の文科の知識を学ばなければならないと一貫して主張してきた。先生は知識が豊富で，記憶力が優れていたので，文章はいつも自由闊達に書かれている。先生はコロンビア大学で学んでいる時，動物学，遺伝学を専攻する以外にも，心理学，文学，哲学も学んだ。当時，アメリカの大学では，もし1年の前半期の学科目の成績がよければ，残り半年の授業を休むことができ，最長5週間，授業にでなくてもよかったのである。何がしたいかを学生に任せた。潘先生はこのチャンスを利用して，図書館にこもって，書庫をめぐり，その後さまざまな分野を行き来して，最後に社会学と優生学に転じた。ニューヨークに行った最初の夏休みに，先生はロングアイランドのコールドスプリングにある優生学記録館での優生学研究者の夏期講習会に参加した。1924年と1925年の夏，また2回この優生学記録館で，人類学と優生学の研究活動に参加した。また同時に，1925年カーネギー研究院での内分泌学の夏期講習会に参加した。1926年夏，さらにマサチューセッツ州の海浜生物研究所で単細胞学を学んだ。このように先生は，あたかも飢渇しているように，わずかの時間を利用して学業に励んだ。もともと規定によれば，清華の留学生

は 5, 6 年の公費を受け取ることができた。潘先生は 4 年で学業を終えて，修士学位を取得した後，本来ならさらに 2 年間博士課程で学ぶことが可能であった。しかし，先生は「アメリカのブルジョアの生活様式が気に入らなかった」し，アメリカで学んだ知識はすでに今後の研究と活動のための基礎を築けたし，帰国後わが国の情況と結びつけて研究を展開することができると考えた。したがって，1926 年秋，先生はためらうことなく帰国した。先生は，早くに留学の目的は帰国後，祖国のために尽くためであると述べている。その愛国の心は明らかである。

二. 優　生　学

潘先生は遺伝という手段によって，たくましく，優良なこどもを産むことを発揚するために優生学を提唱した。優生学は社会学と生物学の範疇に属する。社会学の視点からみれば，当時の優生学の研究は，文化教育の観点からアプローチしているひともいるし，栄養健康の観点からアプローチしているひともいる。ところが，潘先生はダーウィンの自然淘汰ないし自然選択の観点に立脚して研究を進めた。ただ 1883 年にイギリスのフランシス・ゴルトンが優生学を樹立して以後，優生学は伝統道徳に許されるものでなかったので，人びとの反対を受けた。とくに潘先生がコロンビア大学で学んでいる時，崇拝しかつ自分の私淑する先生とみなしていたのは H. エリス（Henry. Havelock. Ellis 1859–1939）であったが，このイギリスの学者は性心理学，性教育を研究したために，一生不遇であった。潘先生は優生学を研究することはこの種の不遇にでくわすことを承知のうえで，かえって変わることなく鋭意研鑽に努めた。まさに費孝通先生が潘先生の研究は「民族の資質を高める」ことにあるといったように，完全に崇高な愛国心から発している。第 2 次世界大戦後，優生学は世界で認められたが，ところがわが国では依然として反対の態度をもつひとがあった。だから抗日戦争に勝利してからまもなく，潘先生は次のような詩を作った。「私淑於今二十年，狂言驚座敢先傳，独憐孺子披猖甚，一識相思百事蠲」（要旨：（エリスに）私淑してすでに 20 年が経ち，世間をあっと言わせる思想を敢えて伝播した。乱暴な批判は哀れなほど無知だと思い，真理を一旦手に入れたらすべての不愉快な思いが払拭された）。

多くの科学の学説は，自然科学であろうと社会科学であろうと，発表当初はつねに多くのひとの反対に合うものである。19 世紀中葉，ダーウィンはサルからヒトへの進化や生存競争と自然淘汰の適者生存という進化論を発表後，直ちに多くのひとから，とくに宗教界からの風刺と痛烈な非難を受けた。なんとダーウィンの先祖はサルだといわれた。18 世紀のマルサスの人口論も同様の排斥を受けた。しかも，マルサスにはでっち上げの罪名が押しつけられた。かれの理論それ自体は多くの誤りがあるし，かつ未来社会の発展への予測も不十分であるけれども，しかし畢竟かれは人口問題を提出したはじめての人物である。マルサスの人口論はその後

の人口激増の抑制に関する研究を巻き起こし，人口の抑制対策の措置も促した。ちなみに，わが国の農村で計画出産の仕事に携わる基層幹部も民衆に嫌われている人物である。

20世紀初期，アメリカのイェール大学の人文地理学者E. ハンチントン教授が中国東北地域で調査を行なったことがある。その後，かれはこの地域での移民問題について論文「自然淘汰と中華民族性」を書きあげた。かれは「われわれは，淘汰と文化の進展との関係を証明できる比較的最近の例をあげることができる，・・・瀋陽は今日の中国のすべての都市のなかで，もっともひとの往来が盛んでにぎやかな活気のある都市である。人びとの話しによれば，ハルピンは瀋陽より進歩的なところであるが，実際，もっとも進歩な地域は最北のいくつかの都市，たとえば黒龍江の上流である。ロシア国境の海蘭泡に向いあう瑷琿，そこに住む中国の人びとはとくに一種独特の活発な精神をもっており，他の地方の中国人と非常に異なっている・・・。近代（1840～1919）の満洲の人口のほとんどは，山東，河北から移住してきた人びとである。・・・この移民たちは能力がある人びとであり，20人，50人，ひいては100人のなかからやっと一人あらわれるくらいである。かれらには冒険精神があり，行動力もある・・・（かれらの子孫）のなかで，さらなる冒険精神をもつひとは，引き続き北のほうへ移動し，父親の世代よりもっと遠いところに移住した。移住地域での生活がうまく行けば，かれらは先輩のように，故郷の家族を迎えに来る。・・・要するに，今日の東北三省の北部の人びとはどこにでもいる中国人ではなく，河北，山東の二つの省から選びだされてきたもっとも精悍な中国人である」と述べている。

ハンチントンに啓発されて，潘光旦先生は1932年，すなわ「九・一八」事変が発生した翌年に，「中国民族生命線の東三省」という一文を発表し，「東三省は中国の穀物庫，鉱山，商工業の発達した地区である以外にも，中国民族のなかの優秀な人びとを育てる大きな土地でもあるから，どうして敵に渡すことができようか」と中国は決して東三省を手放すことはできないことを言明した。したがって，先生は東北に向かって移住する中国人の歴史を深く掘り下げて考察したのである。歴史にもとづけば，移住運動は明太祖の朱元璋の洪武年間，おおよそ西暦1370年からはじまった。当時，平定した遼寧に軍隊の衛所を設けた。その後，50～60年間に，衛所はじつに30か所あまりになった。もし1衛所当たり5600戸，1戸当たり5～6人であるとすれば，総人口が100万あまりに上ったと考えられる。この100万余りのひとの末裔こそ，現在の東北の主要な人口である。清朝は漢人の移住を禁じたが，しかし康熙帝が禁令を発してから光緒末に禁令が廃止されるまで，200年余りの間に，漢人は禁令を犯して次次と移住者があり，数100万人にとどまらなかった。

うえで述べたように東北3省の基本的な人口は，明朝のはじめから清朝中期までの漢軍の末裔であり，清朝中期から満洲鉄道が開通するまでの100年余りの間，山東および河北農村から徒歩で移住したひとが多かった。当時，この二つの省は貧困地区であった。農民はひもじい思いをし，ぼろをまとっていた。かれらは，東3省は多くの土地が耕すひともなく荒れ果

てた不毛の地であり，人びとによる開発をまっているということを聞いた。そしてまだ船や車などのいかなる近代的な交通手段や郵便もない状況のもとで，なんにんかの体が丈夫で，頭もきれるし腕もきき，危険をものともしない，苦難を恐れない，進取の気概をもった優秀な仲間が千里の道をいとわず，同道し，荒地を開墾して富を目指した。かれらははじめのうちは家族を伴わなかったので，毎年一度の帰省が習わしとなり，豊かな労働の成果を手にもって家族を慰安し，養った。いまかれらは衣食に不自由のない生活をしており，辛酸な生活で鍛えられて，身長も高くなり，身体も壮健になった。人びとはかれらを東北のランナー（跑腿）と称した。というのも，1931 年に杭州で開催された全国運動大会で，100 メートル競走の男子の 1 番は劉長春，女子の 1 番は孫桂雲で，二人とも東北出身であったからである。その他の陸上競技種目でも東北健児の多くが賞を獲得した。かれらの健脚は先祖伝来のものである。かつて 1929 年 5 月，南開大学長の張伯苓がニューヨークで講演した時に，南開大学の学生の約 10％は東北出身であるといった。かれらはすべて内地出身の者と較べて強靭で大柄であり，行動は活発で力強いし，また内地の者と較べて人目を引いている（『密勒氏評論報』⑤（The China Weekly Review），第 48 巻 9 期）。抗日戦争中，黒龍江省の義勇軍の領袖王徳林，丁超，李杜らが統率した兵士はみな自らを顧みず戦い，敵の死傷者はわれらの数倍であった。これらの勇敢で，積極的で，そのうえ開拓精神をもった精鋭たちが祖国のために戦ったので，1932 年に潘光旦が述べたように，東北 3 省は日本人の手に決して落ちなかったのである（1999 年，世界卓球大会での東北の末裔である二人の傑出した名選手の馬林，孔令輝はまたもわが国の栄誉を高めた。若い精鋭の馬林はスウェーデンの無敗のヤン＝オベ・ワルドナー（Jan-Ove Waldner）を徹底的に打ち負かしたし，孔令輝もまたわが国卓球界の大黒柱の一人になった）。

潘先生の考えによれば，どんなことをやるにも抜群な知力や意志力を有するひとの先導が必要なので，リーダーもあり，大衆もあって，社会ははじめてバランスをとって発展できるのである。リーダーは労働者，農民，商人，学生，兵士あるいは行商人やその使い走りといったひとから生まれてもよい。知力とはなにか。かれは，知力は「進歩の適応力」であるという意見に賛成している。いわゆる進歩の適応力はただ学習の能力ばかりでなく，多くの心理的な素質，つまり勇敢，意志力，根気のよさ，決意，将来の見通し，計画能力および計画を実行する時の臨機応変などの能力の総和を指す。このような素質をもつひとは，その成功の可能性がこのような素質をもたないひとよりはるかに高い。これは個人のばあいも，種族のばあいもそうである。換言すれば，これもまた優生学の選択と淘汰の過程であり，生存競争と自然淘汰であり，適者生存の過程である。たとえば，歴史上の，および現代の自然科学者と社会科学者であるが，かれらはよしんば自らの生活上の楽しみを犠牲にしてでも，さまざまな評判にもかかわらず，粘り強く仕事に打ち込むなかで，結果として巨大な成功を得ることができ，人類に対して極めて大きな貢献をなした。別の角度からみれば，現在の大学の少年班の学生は，その知能指数は高くないとはいえない，しかし家長の庇護と教師の特別の配慮のもとで，ある学生はあ

ろうことか無為に日を過ごしており，成績も一般の学生のほうがよい。

三. 中庸思想

潘先生は極端主義に反対している。かれは孔子の中庸の道をしっかりと心にとどめて守り従っている。中庸はわが国の哲学思想の重要な概念である。儒教哲学の名著である『中庸』は，そのなかで「中・和を致せば，天地位し，万物育す」⑥と説いている。ある学者は「位とは位置が安定すること，育とは生の全過程を完遂することであり，つまりそれは位育である」という。孔子は論語のなかで，一貫して過ぎたることと及ばざることを批判した。というのも，やり過ぎることとやり足りないことはいずれも中庸の道ではないからである。文革期にわが国で左派の路線がはびこって災いとなったように，人びとに極めて大きな苦しみを与えた。この痛ましい教訓は，現在でも詳細を語るに及ばないことであろう。幸い11期3中全会（1978年12月）のなかで，聡明で勇気ある傑出した政治家であり，理論家である鄧小平が思想の解放を提出し，実際に即して正確な方法をみいだす政策を提案したので，わが国はやっと真の復興を得ることができた。鄧小平は階級闘争を要とするスローガンを停止し，生産力を高めることを国の主要任務として提起した。かれは計画経済を市場経済に改め，かつまた先進国のやり方の有効な経験を吸収したことで，多くの農村世帯の暮らし向きが安定したし，都市の住民のなかにも少なからず富裕世帯を生みだした。現在，わが国は江沢民主席をリーダーとする党中央，国務院およびその指導グループは尽力して世界平和を推し進めている。これは共産主義理論や鄧小平理論をさらに発展させたものである。というのも共産主義は各人がそれぞれ最善を尽くし，各自必要な分だけ受け取ることで社会を安定させることを究極の目標としており，鄧小平理論もまた安定団結，思想解放，実事求是を主要な綱領としている。

なん年か前，ある社会学者も中庸思想を話題として取りあげたことがあるが，しかしその後みんなはこの思想について議論をしなくなった。というのも，過去にあるひとは中庸の道をまるで日和見派のようである，つまり中間路線と考えた。実際には，古代に中庸の道を講じたのは孔子だけではない。孔子より167年後のギリシャのアリストテレスもまた『倫理学』のなかで，中庸の道を主張したことがある。アリストテレスは中産階級を多数とする社会がもっとも安定した社会だと考えた。調和の社会に言及した時，われわれは社会学の創始者オーギュスト・コントをすぐさま思いつく。かれは1839年に社会学（Sociologie）ということばを造語した。かれは実証哲学の観点から社会現象を研究し，社会学を社会静態学（社会内部の調和状態の説明）と社会動態学（社会の歴史的発展の説明）に分けた。コントは社会の各部門が調和的に相互依存することをよしとした。そして，この調和依存によって社会の安定が維持されると考えた。

潘先生は1936年に論文を発表し，わが国の人口問題を討論した。かれは，わが国の人口は

過剰であり（当時のわが国の人口はまだ 4 億 5000 万人に過ぎなかったが），数量的に社会的な適応が崩れていると述べた。潘先生によれば，人びとの素質は高くなく，非識字者もはなはだしく多く，国家全体の技術も立ち遅れており，農民の平均耕作面積もあまりにも小さい。それゆえ，貧困が蔓延している。現在の人口の状況に照らせば，ひとは貧乏であればあるほど子だくさんになる可能性がある。したがって，人口の増加はますます抑制できなくなる。これによって，人口素質のバランスもくずれてしまう。このような現実に直面して，まず優生，優育の宣伝を強力に行ない，厳格に人口の増加を規制し，内陸部に小都市と町をつくり，商工業と第 3 産業を発展させ，農村人口を受け入れて，内陸の人びと，とくに農民を豊かにさせなければならないと説いている。

四. 民　族　学

わが国は多民族国家である。人口のもっとも多い漢族以外に，55 の少数民族がいる。新中国成立後，徹底的に民族抑圧制度を廃止し，各民族間の平等団結を実現させて，民族地区の自治を実行した。それぞれの少数民族は民主的改革と社会主義的改造を進めた。

潘光旦先生はかつて 1952 年に北京中央民族学院で仕事をしていた時，呉文藻と費孝通の二人の先生とともに少数民族のトゥチャ族（土家族）（あるいは土族とも称す）の実地調査に湖南へ行った。潘先生はまた 1957 年春（この時，先生や呉，費の両先生のだれもまだ右派のレッテルを貼られていなかった），浙江省と江西省のシュー族（畲族）の面接調査を行なった。1962 年 1 月，先生はまた呉景藻，費孝通，浦熙修の三人とともに福建羅源県の畲族地区で面接調査を行なった。なぜかれらは，山を越え，川を渡り，辺鄙で荒れ果てた貧しい場所を訪ねなければならなかったのか。潘先生はかつて，われわれの祖国の歴史は，ある部分では異なった特徴をもった多民族の接触，交流融合の歴史であるといったことがある。この過程はこれまで途切れることがなかったし，なおかつまだ発展しつつある。漢族の形成について，われわれは今に至ってもまだ科学的な説明をもっていない。漢族はなぜ現在の世界でもっとも多くの人口をもつ民族となり得たのか，決して漢族が単純に自然繁殖した結果によるものではない。これは中国の歴史の発展過程のなかで，本来漢族でない人びとを絶え間なく吸収し，発展してきたからである。その他の民族もまた，実際にはもともと，同一性をもつと思われない人びとが逐次融合することによって，成立してきたのである。融合は一つの側面であり，もう一つの側面に分化がある。不断に融合しては，また分化する過程のなかでわが国の現在の民族の構造が形成されたのである。潘先生の精緻な分析は，われわれの祖国の 5000 年の歴史の概括といっても差し支えなく，われわれの視野を広くしてくれたのである。

五．愛国の熱情

潘先生はアメリカでの学業の最後の1年間は，飢えたように優生学，遺伝学を学んだ。先生はイギリスの学者エリスに私淑した弟子と自認した。先生はエリスが優生学を研究したが故に終生志を得ないまま過ごしたということを知っていながら，祖国の民族の素質を向上させるために，毅然として予定の期限を早めて帰国した。むしろ自分の前途を犠牲にしても，その仕事に没頭して飽きることがなかった。これは愛国の熱情にほかならない。昆明の西南連合大学時代，先生はもともと過激派ではなかったが，国民党反動派の腐敗した暴虐的な統治を目にし，聞一多，呉晗らとともに共産党の指導を受け入れ，蒋介石に反対し，積極的に愛国民主運動に参加したし，国民党に心底憎まれている中国民主同盟に加入した。それ以来，先生は日一日と差別，迫害を受けた。国民党のスパイが李公樸，聞一多を殺害した時，スパイは先生およびその他の進歩的な人物も殺すといいふらした。1948年末，先生は張奚若，費孝通および清華大学の教師，学生とともに解放を喜んで迎えた。1949年10月1日，かれは松葉杖で，頑張って開国の大典の行進に参加した。不幸なことに，かれは1957年の反右派運動拡大化のなかで，誤って右派分子と区分された。引き続いて10年の災禍（1966～1976年の文化大革命のこと）のなかで，また反動分子として打ちのめされた。1967年夏，10年の苦難をなめたあと，かれは前立腺炎を患った。ある日，野良仕事中，前立腺炎が激しい発作を起こし，北京の積水潭病院へ救急搬送された。あのような時代に，右派でかつ反動者とされた人物に対して，医者のだれもが本気で治療する勇気をもっていなかった。潘先生は心身ともに疲れ果てており，一人っきりであった。幸いなことに，潘先生の学生であった費孝通先生がかれの世話をし，かれを台八車に乗せて病院から民族学院の自宅まで連れて帰った。まもなく，潘先生はそこで世を去った。年齢は68歳（67歳と10か月）であった。この時，夫人はすでに9年前に亡くなっており，4人のご息女はだれもそばにいなかった（当時は，傍らにおれない政治的局面であった）。この時代の著名な学者であり，教育者である先生はこのようにこの世と永遠の別れをした(1)。

【付録】　潘光旦年譜(⑦)

潘光旦，字は仲昴。中国の社会学者，優生学者，民族学者および教育者である。1899年8月13日生まれ，1967年6月10日逝去，享年68歳。

1899年　8月13日江蘇省宝山県羅店鎮（現・上海市）の知識人の家庭に生まれる。父潘鴻鼎は清の光緒24年戊戌科二甲の合格者13名の進士の一人であり，かつて翰林院の編纂記録職を務めた。

1905年　6歳　羅店鎮の私塾で学ぶ。

1906年　7歳　上海大東門内火神廟のある小学校で学ぶ（すなわち「養正学堂」か）。

1907年　8歳　宝山県羅店鎮羅陽初等学堂で修学し，1912年冬13歳で卒業。

1911年　12歳　「厳光不仕光武論」文を書く（散逸）。

1913年　14歳　清華学堂に入学し，学ぶ。1922年（23歳）卒業。

1914 年　15 歳　清華で「雑記」二件を発表し，「清華週刊」に掲載する。署名は潘光亶。
1915 年　16 歳　運動会に参加し，右の足を負傷し体が不自由になった。1915 年，1916 年と 2 年間休学し，入院および自宅療養を行なう。
1918 年　19 歳　『清華周刊』にエッセイや翻訳文を多数発表。
1919 年　20 歳　『清華学報』にエッセイや翻訳文が多数発表されている。
1920 年　21 歳　多くの短文が『清華周刊』に発表されている。
1921 年　22 歳　同上。
1922 年　23 歳　『馮小青考』を書く。2 年後，『婦女雑誌』第 10 巻第 11 号（1924 年 11 月 1 日）に掲載される。
アメリカに留学し，ニュー・ハンプシャー州ハノーバーのダートマス大学に編入学し，生物学を学ぶ。アメリカ優秀学生連合に参加する。
兄の潘光𤣥が上海で商工業に従事。弟の光迥が清華を卒業。
妻趙瑞雲，江蘇嘉定のひと，1898 年生まれ。江蘇省立女子蚕業学校卒業，かつて蚕業教育の仕事に 6 年間従事。婚姻後は，家事を切り盛りする。1958 年病死。4 人の子女，乃穂，乃穆，乃和，乃谷はそれぞれ生物学，歴史，軍医，農機を学ぶ。4 人とも共産党員。
1923 年　24 歳　『優生と中国－背景の初歩的調査－』を書く。アメリカの Eugenical News の 8 巻 11 期に掲載される。夏，ニューヨークの優生学記念館の優生従事者夏期訓練に参加し，学習する。1924 年，1925 年の夏，いずれも当館で人類学，優生学の研究を行なう。
1924 年　25 歳　ダートマス大学卒業，学士号を取得。アメリカ優生学研究会に加入。8 月『東方雑誌』第 21 巻第 22 号（11 月 24 日）に「中国の優生問題」を発表。周建人が「中国の優生問題を読む」を発表し，批判意見を提出する。夏休みの期間に，聞一多らが組織した「大江学会」に参加し，国家主義を鼓吹し，「国内的には改革運動を実行し，外国に対しては列強の侵略に反対する」。
1925 年　26 歳　ニューヨークのコロンビア大学大学院に入学。中国の留学生が孫中山先生の追悼会を行なうために「中山遺言状」を英文に翻訳した。また，友人と「国民党第一回全国代表大会宣言」共訳し，『留学生月報』に掲載した。
1926 年　27 歳　この年の『留学生季刊』の代理総編集を担当する。夏，コロンビア大学大学院を修了し，修士号を取得。また，マサチューセッツ州の海浜生物学研究所で単細胞生物学を学ぶ。8 月，帰国し，上海呉淞国立政治大学の教授兼教務部長（1 年間）に就く。
1927 年　28 歳　5 月 1 日，『時事新報・学灯』の編集を担当する。『学灯』に掲示し，中国の家族問題について意見を募り，のちにそれらを分析して発表した。
この年の 8 月から 1924 年まで，前後して上海光華大学，大夏大学，暨南大学，東呉大学法科，復旦大学，滬江大学で授業を行なった（兼担を含む）。また，聞一多，梁実秋，徐志摩，饒孟侃，葉公超，胡適らと共同で「新月書店」を経営した。9 月，『小青之分析』を新月書店から出版，再版は『馮小青』と改名。
1928 年　29 歳　1928 年 3 月，新月書店から『中国之家庭問題』を出版。1929 年 4 月再版，1931 年第 3 版は商務印書館から出版。3 月，聞一多らと『新月』（月刊）を創刊する。ここから，文壇では“新月派”と呼ばれる。10 月，新月書店から『人文生物学論叢』第一編を出版。再版時は，『優生概論』と改名。
1929 年　30 歳　10 月，東南社会学会の『社会学刊』第 1 巻第 2 期に「優生と文化－孫本文先生との討論－」を発表。12 月，『自然淘汰と中華民族性』を新月書店から出版。
1930 年　31 歳　光華大学文学院院長ならびに教科担当に 1931 年まで就く。家譜学などの課程を開設する。11 月，中国社会学社の第 1 回年会に参加し，「家譜と宗法」を発表する。呉淞中国公学大学部社会科学院院長に就く。
1931 年　32 歳　『中国評論周報』に多くの文章を発表する。
1932 年　33 歳　4 月，『華年』（週刊）の編集長になる。
1933 年　34 歳　『華年』（週刊）の編集を継続。
1934 年　35 歳　4 月，「小青考証補録（上編）」を発表し，『人間世』第 2 期に掲載。下編は『人間世』

第 3 期に掲載。9 月，H. エリスの「性的道徳」を翻訳し，上海の青年協会書局から出版。9 月 1 日から母校の清華大学社会学部の招きに応じて教授に就く（1952 年 10 月まで）。社会思想史，家族問題，優生学などの授業をもつ。9 月，『宗教と優生』を青年書局から出版。

1935 年　36 歳　「書『馮小青全集』后」文，『人間世』29 期，30 期に掲載。

1936 年　37 歳　1 月，「陳通夫先生の『人口問題』を紹介する」を発表，『北京晨報』に掲載。2 月，清華大学教務長に就く（1946 年 7 月まで）。

1937 年　38 歳　9 月 16 日，北京を離れて南下。28 日，長沙臨時大学教授に就く，入学手続き係りの主任を兼務。

1938 年　39 歳　西南連合大学教授に就く（1946 年 7 月まで），教務長（1938 年 7 月まで），清華大学図書館主任を兼務（1946 年まで）。

1939 年　40 歳　8 月，清華大学秘書長を兼務（1941 年 7 月まで）。

1940 年　41 歳　『今日評論』に多数の論文を発表。

1941 年　42 歳　秋，中国民主同盟に加入し，第 1 回，第 2 回中央常任委員，第 3 回委員に就く。

1942 年　43 歳　『雲南日報』，『中央日報』に多数の論文を発表。

1943 年　44 歳　李根源の招請に応じて雲南大理の第 11 集団軍幹部訓練班で「抗戦建国と中華民族」の講演を行なう。西南連合大学時代および清華大学に戻ってから，優生学，家族問題などの課程以外にも西洋社会思想史，中国儒家社会思想史，人材論などの課程を順次設けた。

1944 年　45 歳　「知識青年の兵役を激励する」を発表し，『自由論壇』増刊第 7 期に掲載。11 月，民盟雲南を創立し，機関刊行物『民主週刊』を発刊。潘が社長に就き，編集者の一人となる。11 月，重慶で 5 大学社会学部の招きにこたえて「社会学者と中国社会」の討論会を主催。

1945 年　46 歳　7 月，西南連合大学の教務長を兼務（1946 年 7 月まで）。12 月 1 日，昆明で内戦に反対する民主「一二・一」運動が勃発し，4 名の青年がスパイに惨殺される。潘や聞一多らは終始学生側にたち，討論会に参加し，声明を発表した。

1946 年　47 歳　夏，『鉄螺山房詩草』を脱稿。1 月 13 日，聞一多，費孝通，呉晗と連名で，「マーシャル将軍への四教授の書簡」を発表し，国民党政府の独裁的反動の本質を憤って指摘した。6 月，民盟雲南支部を代表し，3 回にわたり座談会を開き，民盟は内戦に反対であること，平和を要求すること，独裁に反対であること，民主的なしっかりした立場と主張を要求することを表明した。7 月 14 日，殺害された李公樸のために弔辞を書く。8 月 9 日，蘇州へ。10 月，清華大学に戻るとともに，図書館主任を兼職（1952 年まで）。（1946 年夏～秋，国民党のスパイが李公樸，聞一多を殺害した時，スパイは潘光旦およびその他の民主的な進歩人も殺害すると高言したので，かれと費孝通らは一時的に昆明のアメリカ領事館に避難した。陳理，2000 年，潘光旦先生簡介，陳理・郭衛平・王慶仁主編，前掲書，P.23）。

1947 年　48 歳　8 月，ユネスコ中国委員会委員に推薦され，南京での成立大会に出席。

1948 年　49 歳　清華大学は地下党と国民党反動派の闘争なかで，12 月 15 日に解放を迎えた。潘は共産党の保護のもとで欣然として解放軍を迎えた。

1949 年　50 歳　10 月 1 日，建国パレードに参加。10 月，中央人民政府政務院文化教育委員会委員に就く。中国人民政治協商会議第 2 回，第 3 回，第 4 回全国委員会委員など就く。

1950 年　51 歳　『光明日報』，『文滙報』に多くの時事論文を発表。

1951 年　52 歳　蘇南へ行き，土地改革⑧の実地調査を行なう。全慰天と共同で「誰説“江南無封建”？」などの論文を発表する。

1952 年　53 歳　11 月，中央民族学院教授に就く（1967 年逝去まで）。

1953 年　54 歳　『開封的中国猶太人』を中央民族学院から謄写版印刷本として出版。

1954 年　55 歳　中国人民政治協商会議第 2 回全国委員会委員に就く。

1955 年　56 歳　「湘西北“土家”と古代巴人」を発表。

1956 年　57 歳　6 月，湘西北土家地区を訪問。

1957 年　58 歳　7 月，誤って「右派」に区分される。

1958 年　59 歳　社会主義学院に入り，学習（1959 年 3 月まで）。

1959 年　60 歳　第 3 回中国人民政治協商会議委員に就く。10 月から 1964 年まで『辞海』編集の仕

事に携わる。この年から 1962 年まで，中・印，中・パキスタン国境問題の資料の翻訳に従事する。12 月，「右派」のレッテルが取り外される。（この後 21 年後，没後 13 年の）1980 年 3 月，名誉を回復する。
1960 年　61 歳　1959 年の各項の仕事を継続。
1961 年　62 歳　「従徐戎到畲族」と題する民族学の論文を書く。
1962 年　63 歳　『資治通鑑』の少数民族資料に圏点を付ける仕事を行なう。
1963 年　64 歳　『史記』のなかの民族資料に圏点を付けたり，500 枚のカードを登録する仕事に従事。
1964 年　65 歳　『春秋左伝』，『国語』，『戦国策』，『竹書紀年』，『逸周書』，『世本』などの民族資料に圏点を付けたり，500 枚のカードを登録する仕事に従事。
1965 年　66 歳　清華大学大学史作成班の取材を受け，郭道暉が「談留美生活」の記録をまとめる。
1966 年　67 歳　ダーウィンの『人類的由来』の翻訳を仕上げる。
1967 年　68 歳　5 月 13 日，危篤に陥り，積水潭病院に入院。6 月 1 日，中央民族学院内の自宅に戻り，6 月 10 日逝去，享年 68 歳。

うえの韓明謨による潘光旦年譜には文革期の記述はないが，実際には潘は 1957 年に右派の罪名を着せられたことに続いて，文革期にも厳しい迫害をうけている。その一部は本訳稿の最終部分の記述にもみられるとおりである。しかし，潘が右派に区分されたことおよび文革で迫害されたことについて，全部で 30 編の論稿が掲載された『潘光旦先生百年誕辰紀念文集』には励天予の論稿以外にも論稿がある。政治と学問および知識人との関連をみるために，それらのいくつかを次にあげておきたい。

「非常に遺憾なことであるが，“反右”および 10 年の災禍（1966～1976 年の文化大革命のこと）の時，潘光旦先生はきわめて不当な扱いを受けた。これは特殊な歴史的条件のもとで当時のひとが行なった誤りであり，党の 11 回 3 中全会で徹底的に罪は破棄され，名誉を回復したけれども，わが大学の教員，学生，職員は往時のことに触れることは，だれもがひどく心が痛む歴史である。もしこのような歴史がなければ，潘先生はもっと長生きでき，もっとよい状態であったろう。かれのすぐれた才能もきっともっと十分に発揮でき，繰り広げることができたので，社会のためになす貢献ももっと多く，もっと顕著であったはずである（哈経雄，潘光旦先生に学び，民族の高等教育事業を成し遂げよう，p.19）。

「費孝通先生は潘とはひときわ友情が一途であった。潘が 10 年の災禍のなかで病を患いそして前後して逝去し，そのうえ 4 人の娘さんの誰もが身近にいない情況のなかで，費孝通先生は自らも公然と批判されており，非常に困難な境遇であったにもかかわらず，今までどおり危険をものともせず，潘の世話をした」（陳理，潘光旦先生簡介，p.24）

「・・・文革 10 年のなかで，業績のある大部分の学者はみんな批判されたが，潘先生のように文革の 2 年目に迫害の犠牲になったひとは結局のところ少数であった」（喬健，“潘光旦紀念講座”の準備ならびに潘光迥先生の追想，p.25）。

「わたしが潘先生と知り合ったのは，大学卒業後，学部の助手になった 60 年代の初期である。その時，反右派闘争がすでに終わり，数年が経っており，聞くところによれば“改造”が成功したとのことで，潘，費孝通，呉文藻など何人かの有名な教授は“人民内部に帰ってき

た”としてすでに名誉回復していた。がしかし，教壇に立ち学生に向かって講義をすることができなかった。ただ第二線で資料収集などのいわゆる教育の補助的な仕事しかふりわけられなかった」（索文清，潘光旦先生と知り合ったころ，p.47），「1962 年末からはじまっていた四清運動で，大部分の教師は農村に行かされており，大学の研究活動は正常に行なうことができなかった。引き続いて歴史上前例のない文化大革命が起こり，わたしはお別れをしたと思って潘先生の家に行った時，先生は書斎にはいなかった。先生はすでに“牛棚”（文革期に批判対象の人物を軟禁した小屋）に入れられて，批判闘争と労働改造を受けていた。自宅の蔵書や未完の原稿も差し押さえられていた」（索文清，潘光旦先生と知り合ったころ，p.51）。

「敬愛する舅が亡くなったという訃報をわたしが辛うじて知ったのは数年後である。文化大革命がやってくると，みんなはおのおの苦難に耐え，すべての音信は途絶えた。1975 年あるいは 1976 年の前半分に，わたしは外国からの賓客を伴って民族学院に参観にいったところ，費孝通先生と謝冰心先生が接待にきてくださって思いがけなくお会いした。その日，費先生にお目にかかったが，まさに隔世の感があった。当時，費先生らの立場はいずれもみな不正常であったので，この二人の大家は外国からの賓客に対して中国語でしか話すことができず，年若いひとが通訳を行なった。しかし，費先生とわたしは参観の合間に少しばかしやはり言葉を交わした。費先生はわたしに，潘先生はすでに 1967 年に亡くなったと告げた。費先生は，潘先生の体力はとても壮健で，どんな大病もしていない。もしちゃんとした治療があれば，まさか死ぬことはなかっただろうといった。また，あなたが気にかけているように，潘先生は片方の足しかなかったのに，草ぬきをさせられ，そのうえ小さな腰掛さえも使うことも許されなかったといった。・・・さらに費先生は乃穆（潘先生の二女）の夫もすでに亡くなったといった。しばらく，わたしたちは話すことができなかった。それから，わたしが費先生ご自身はどうですかと尋ねたところ，ご夫人があまり良くなく，気持ちが張りつめているといった。先生は怒りに満ちたため息をつき，そしてついてゆけないといった。このことばをわたしは永遠に忘れることができない。わたしは，費先生と潘先生の友情は一冊の本になると思っている。また，乃穆は潘と自分の夫の遺骨を共同墓地に預けようとしたが，許されなかった。乃穆は二人の遺骨を自宅に置いておくとまた厳しい批判を受けるだろうと考え，後ほど戸惑いながら北京大学の一本の樹下に埋めた。いまはすでにその痕跡はない。80 年代に潘先生の名誉が回復された時，共同墓地に遺骨の代わりとしてただ一つの（青紫色の瓢箪型をした）磁器製の瓶を埋めた。まさに昔のできごとは煙のようである。去年（1999 年），潘先生生誕 100 年紀念座談会で乃穆は，この磁器製の瓶もまたなくなっていたと話した。ほんとうにもうなにをいったらいいかわからなくなった」（張雪玲，敬愛する舅潘光旦先生を偲んで，pp.69–70）。

「解放から 1957 年の“整風反右”の寸前までが，潘光旦教授の研究，教育活動がもっとも順調に進んだ時期であった。“整風反右”のなかで，潘先生は不公正なあつかいを受けた。かれの土家族研究は“党を攻撃する”ための“中傷”と“罪状”だといいなされた。潘先生のい

くつかの研究の結論も先生がいったということだけでその価値が否定された。そこで，1957年9月20日，湘西苗族自治州が廃止されて，これと同時に湘西土家族苗族自治州が誕生した時，人びとはすでに土家族研究における潘光旦先生の懸命な苦労と卓越した貢献について再び触れなくなった」（胡起望，厳格な研究態度　勤勉な学問探究－潘光旦教授を深く偲ぶ－，p.78），「1966年，“文化大革命”が勃発し，潘光旦教授は苦しい立場に追い込まれた。先生は“反動学術権威”の大看板をかけられ，書斎と寝室が封鎖されたので，台所のコンクリートの床にむしろを敷いてしか寝ることができなかった。なかでも夏の炎天下，運動場での草抜きをさせられた。先生は右足を切断しており，お尻を地面につけずにしゃがむことができなかったので，直接湿った草地のうえに座らざるを得なかった。上からは太陽に晒され，下からは蒸されて健康状態が急に悪化した。病気になってから積水潭病院に入院し治療を受けたが，その後も治療は望みがなかったし，条件も日増しに悪くなってきた。したがって，先生は自宅に移動することを強く要求した。ついに，1976年6月10日（自宅で）不幸にして亡くなった。この時代の著名な学者はここにこの世と別れを告げた」（胡起望，同上，p.81）。

〔編著者注〕

(1)　この論説の資料は，主に『潘光旦文集』および潘光旦先生の学生であった北京大学社会学部の韓明謨教授が書いた「潘光旦先生は中国知識人の誇りである」からのものである。

〔訳者注〕

(①)（　）内で本文より文字ポイントを下げた個所は訳者による加筆である。なお，同じ文字ポイントは原著者によるものである。

(②) ここでは，歴史の一時期での優生学の研究およびそれに対する潘光旦および励天予の見解が述べられている。優生学の成立の歴史的背景，学問的・科学的背景，思想的背景に関しては潘光旦および励天予は言及していない。また，社会ダーウィン主義との関連，あるいはもちろんであるが批判の対象としてのその思想との関連にも触れていない。

(③) 西南連合大学とは，「抗日戦争期の8年間のみ雲南省昆明に存在した国立大学。抗日戦争が始まると，被占領地域にある様々な大学の教員と学生は，日本に抗し，学問の自由を守るため奥地に疎開した。北京大学，清華大学，南開大学の3校は，1937年11月合同で長沙臨時大学を建設するが，戦火が長沙に及んだため昆明へ移転，38年4月西南連合大学と改称して授業を再開した。教員数はおよそ350.・・・学生総数は約8000，卒業生総数は約2500. 日本の敗戦で46年解散，3大学は元の地に戻る」（天児慧ほか編，1999年，岩波現代中国事典，岩波書店，p.621）。

(④) 潘光旦が「社会学の存続はあまり見込みがないだろう」と語った時，すなわち1951年初夏のころには，すでに国家および共産党による大学改造がはじまっていた。

(⑤)『密勒氏評論報』は1917年6月9日にアメリカ人記者のT. F. ミラードによって，上海で創刊された。ブルジョア自由主義の傾向をもった英文の週刊であり，主として中国と東アジアの政治，経済の時事の評論が行なわれた。読者は居留外国人，海外の人びと，国内の政財界人や知識人であった。1953年6月停刊（百度百科，密勒氏評論報から星が翻訳引用）

(⑥) 島田虔次注釈書，1978年，大学・中庸（下），朝日新聞社，pp.40～41を参照。

(⑦) 韓明謨，2005年，中国社会学名家，天津人民出版社，pp.322～330をもとに，訳者が適宜加筆を行なった。

（⑧）中国共産党の指導のもとに，地主の土地と生産手段を没収し，土地を所有しない，またはわずかしか持たない農民に分け与えた土地所有制の改革。略して“土改”という。

（⑨）励天予教授と訳者との関係については，星明著，1995 年，付論　滬江大学付属滬東公社の活動について，中国と台湾の社会学史，行路社，pp.69–72 を参照されたし。

〔付記〕

この翻訳は，2001 年 7 月に編著者の励天予教授⑨（当時，華東師範大学）から訳者が直接，翻訳の許可をいただいたものである。記して，励先生に感謝申しあげたい。1913 年にお生まれの先生は 2008 年 10 月, 上海で逝去された。享年 95 歳。この翻訳をするにあたって 2012 年 8 月 5 日夕刻，上海広元路にある先生のご自宅のご霊前に報告をさせていただいた。かつて，先生にご自身の生活史をまとめられることをご提案したが，もう静かに暮らしたいといわれたことがなぜか思いだされる。

祈励天予先生冥福。

（ほし　あきら　現代社会学科）

2012 年 10 月 16 日受理